



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 39 回 日本語教育方法研究会
石川県政記念しいのき迎賓館（金沢大学）
2012 年 9 月 15 日（土）

下記の通り石川県政記念しいのき迎賓館で開かれます。今回は金沢工業大学の藤井清美先生によるアクティブラーニングに関するご講演も予定されています。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 川村よし子

TABLE 1 第 39 回研究会開催について

日時：	2012 年 9 月 15 日（土）
会場：	石川県政記念しいのき迎賓館（金沢市広坂 2-1-1）
開催委員：	松田真希子（金沢大学） 金庭久美子（事務局、横浜国立大学）

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:30	受付（発表者・一般） ポスター貼付	1:30	講演 藤井清美先生(金沢工業大学) 「アクティブラーニングの最前線」
10:00	開会の挨拶	2:20	口頭発表開始
10:05	会の進め方の説明	3:20	ポスターセッション開始
10:10	口頭発表開始	4:50	ポスターセッション終了
11:10	ポスターセッション開始	5:00	講評、次回開催委員挨拶 閉会の挨拶
12:40	昼食・休憩	5:15	懇親会
		6:30	参加者全員で片付け

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらしてください。非会員の方でも会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。

新規入会：3,000 円（年会費）

当日のみ参加：2,000 円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 総合日本語中級クラスにおける自律した学習者の育成を目指した授業実践

了戒直江・尾崎ちえり・宮永愛子（金沢大学留学生センター）

本研究で育成を目指した「自律した学習者」とは、「能動的に授業に臨み、学期修了後も自身の日本語学習能力を評価し、学習を計画し、日本語力を高めることのできる能力」を有した学習者を指す。その目標達成に向け、まず、「自律した学習者育成」を軸としたオリジナル Can-do リストを作成し、それを基に授業の根底を成すクラスシラバスの改定を行った。そして学習者に目標設定や学習の進捗状況の把握を促し、学習戦略に注目させる授業内容を実践した。本発表では、「自律した学習者育成」をクラス目標の指針とするに至った経緯、具体的な実践内容、結果と課題について報告する。

2. 日本語教科書コーパスの構築と分析—日本語学習者のためのリーダビリティ測定に向けて—

クリスティーナ・フメリャク・寒川（リュブリャーナ大学）

リーダビリティ（読みやすさ）の判定は、弱読者（母語話者学童、読書障害者、外国語学習者など）のための文章を執筆・編集・選別するときに役に立つ判定で、日本語母語話者のための読みやすさに関する研究は近年大きな成果をあげている。本研究では、5セットの教科書からなるコーパスを構築・利用し、母語話者向けリーダビリティツールの応用性を検討する。また、同じコーパスを基に日本語学習者用のリーダビリティ公式を開発するための第1段階として公式の変数となりうる二つのテキスト要素の有用性を検討する。

3. 専門語学習サイト『経済のほんご』の評価と修正

小宮千鶴子（早稲田大学大学院日本語教育研究科）

『経済のほんご』は、経済分野を専攻する留学生や日本企業への就職をめざす留学生を対象とした、経済の基本的専門語とその使い方を学ぶ学習サイトで、2010年10月に公開された。その後、評価のために、アンケート調査、インタビュー調査、および、アクセスログの分析を行った。アンケートとインタビューの調査は、中級後半の学習者5、6名を対象に行った。学習内容などに関するアンケート調査の結果は好評だったが、サイトの使い方に関するインタビュー調査から用語選択の難しさが判明し、サイトのデザインを一部修正した。アクセスログの分析からは、日本を中心に81の国と地域で英語版が最も多く利用されていることがわかった。

4. 中級後半および上級前半の学習者を対象とした地域文化・産業を学ぶ日本語教育の試み

内丸裕佳子（岡山大学言語教育センター）

本発表は、中級後半および上級前半の日本語学習者を対象とした文化クラスでの実践報告である。日本刀、ジーンズ・学生服などの繊維産業、団扇と扇子、麺文化の比較と伝統製法のそうめん、B級グルメと地域の農産物・海産物、といった地域の文化・産業に根差したトピックをとりあげた。このクラスの特徴は、留学生だけでなく、日本語教育副専攻コースの学生と国際交流に興味を持つ日本人学生がボランティアとして授業に参加している点にある。相互学習活動およびプロジェクトワークが留学生にどのような刺激を与えたか、このような形式のクラスを運営する上での課題は何かをアンケート調査から明らかにする。

5. 聞き取り授業におけるシャドーイングの効果を高めるための試み

山森理恵（東海大学国際教育センター）

日本語中級レベルの授業で、聴解力向上を目的にシャドーイングを取り入れ、その効果を高める試みを行った。学期開始時にシャドーイングの意義を十分説明した上で、宿題として課し、録音を教師が評価した。文節評価法を用い、スピード・イントネーション・リズムも評価、上手にできた点も指摘した。その結果、学期開始時と比べ終了時、学習者の聴解力は概ね向上していた。学習者の意識を調査すると、学習者はシャドーイングの有効性についての事前説明、評価票のコメントでほめられること、シャドーイングをやること、シャドーイングの評価が上がることを高く評定していることが分かった。

●ポスター発表（上記5件を含む15件）

6. 上級漢字・語彙教材開発の試み—漢字及び漢字語彙のネットワークに注目して—

藤田佐和子・早川幸子（金沢大学）・八木真生（東京外国語大学）

上級学習者は、既習漢字を体系的に整理しながら、新たな漢字・語彙を学習するとともに、それを使いこなす能力を伸ばす必要がある。しかし、既存の辞書の記述は、学習者の正確な意味理解及び運用には役立たないことが多い。そこで、金沢大学上級漢字・語彙クラスでは、新たな教材を開発した。①意味・形・音のネットワークによって漢字・語彙を整理し、また、②語のコロケーション情報（その語がどのような語と共に用いられやすいかという情報）に注目し、「茶漉」（日本語用例・コロケーション抽出システム）を用いて問題を作成した。問題は、学習者自らが考え、ルールを導き出せるように工夫を施した。

7. パワーポイントを使用したプレゼンテーションについて—日本語学校における実態調査および実践例—

浅田和泉（福岡女子大学）

近年、ICT を利用した教育が急速に進んでおり、多くの大学がパワーポイント(PPT)のようなソフトウェアを使用したプレゼンテーションを授業に取り入れている。それに伴い、大学への入学前予備教育としての日本語教育においても留学生に対し PPT を使用したプレゼンテーション授業の重要性が増している。そこで、実際にどの程度の教育機関が PPT を使用したプレゼンテーション授業を行っているのか、福岡県内の日本語学校を対象に調査を行った。その結果、多くの学校がプレゼンテーションに PPT を使用していないことが明らかになった。本発表では、実態調査の結果を示すとともに、PPT を使ったプレゼンテーション授業の実践例を紹介する。

8. 留学生対象ビジネス日本語・企業文化理解に関する教育—超短期受け入れプログラムの実施から—

伊月知子（愛媛大学国際教育支援センター）

国際的人材育成を目指す日中両国の大学間連携事業の一環として、ビジネス日本語教育と企業文化理解のためのインターンシップ体験を取り入れた短期研修プログラムを企画・実施した。本稿では、学生に対するアンケートや引率教員に対する聞き取り調査をもとに、プログラムの効果について検証し、今後の課題と展開の可能性について考察する。

9. 中級日本語学習者の会話における話題展開の問題

河内彩香（東京大学日本語教育センター）

本発表では、日本語教師各2名による問題点調査結果から、会話における中級日本語学習者の話題展開の問題を分析する。日本語教師2名に中級学習者同士の会話ビデオを見て、話題展開（話を始める、続ける、終える）がうまくいっていないと思われる箇所を記述してもらい調査を実施し、中級日本語学習者の問題点を抽出した。その結果、話題の開始方法、継続方法、終了方法に問題があることがわかった。聞き手のあいづちも問題点に含まれている。日本語中級学習者にも、どのような時に、どのような話題展開表現を使うのかを指導する必要があることが示唆された。

10. 『みんなの日本語 I・II』をベースとした音声教材の開発—総合的クラスにおける音声指導の試み—

渡部みなほ・神山由紀子・田川恭識（早稲田大学日本語教育研究センター）

自然な発音で話したいという学習者のニーズは以前から高い。しかし、読む、書く、聞く、話す、の練習を総合的に行うクラスでは、音声の指導が十分に行われていない。時間的制約によるものだけでなく、適切な教材がない、指導の方法がわからない、といった教材、教師側の問題が指導を困難にしている。以上の状況を踏まえ、我々は総合的なクラスにおいて、日々の授業でも音声指導を取り入れられるよう、『みんなの日本語』をベースとした教材を開発している。また、開発した教材について、教師と学習者にアンケートを行った。本発表では、教材開発の概要、実践を中心に述べるとともに、アンケートで得られた現場の声に関して、その一端を報告する。

11. 日本語の言語行動を中心として言語文化を理解する授業実践報告

堀恵子（東洋大学人間科学総合研究所）

日本の言語文化を理解し、留学生にとって必要なアカデミックな場面における日本語力を高めることを目標とした授業の実践報告を行う。文系の学部2年生を対象とした「日本語と日本文化」と題した授業で、より具体的

な目標は、①多文化の一つとしての日本文化という位置づけにおいて、日本語の言語行動を含めた言語文化を理解し、②日本語の言語行動を客観的に研究する方法を学び、③研究発表に必要となる口頭表現、文章表現を習得する、の3点である。ウチとソト、呼称、敬語などより多くのテーマを取り上げることで学習者に興味を持たせ、よりよく言語文化を理解し、実際の言語行動で生かすことを目指している。

12. SNS ツールを用いた学習ストラテジーの有効性について—SNS 上での情報のやりとりを中心に—

澤恩嬉（東北文教大学短期大学部）・渡辺文生（山形大学）

本研究は、日本語学習者の SNS ツールの使用実態および言語データの分析を通じて、SNS を活用した学習ストラテジーの有効性を探ることを目的とする。学習者の SNS ツール使用には、仲間同士の交流を目的としたコミュニケーションの意図が強く、コメントやグループ機能でのやりとりに学習者の積極的な参加が見られた。また、情報収集を目的とした場合と交流を目的とした場合とで、学習者の母語と日本語を適宜使い分けていることが分かった。SNS ツールは、学習者自ら他者との相互交流に関わる有効なコミュニケーションの場として、大いに期待できよう。

13. 正しくわかりやすい情報伝達を目指して—「メッセージータスク」の実践から—

増田真理子・竹山直子（東京大学日本語教育センター）

日常的な言語行為の一つとして「伝言」がある。発表者らは、様々な状況で、他者から託されたメッセージを、他の誰かに向けて、正しく、かつ、わかりやすく伝える練習を、これまで初級から上級までの幅広いレベルで実践してきた。本発表では、その教材と練習方法を紹介するとともに、このタスクで得られた学習者の発話から「伝言」の困難点、及び、指導の際の留意点を検討する。日本語においては、話者以外に情報源がある場合、文末に伝聞形式の付加がほぼ必須であることから、実際の状況に即してこの点を学ぶことの必要性が示唆される。

14. 観光産業に特化しない「観光日本語」を考える—タイの大学における日本語学科の科目での一例—

中村伊予子

観光産業が盛んなタイの大学の日本語学科では、観光系日本語科目を開講している機関は多いが、元勤務校では一般的な観光産業に従事するための科目としては位置付けていない。日系企業での就業、または、日本からの訪問者対応の機会を想定し、それらに対応するための科目としている。このような独自の位置付けに対応するため、学習内容や語彙の選択には多角的な視点が必要となる。担当した「観光日本語」では日本人ゲストを招いた1日ツアーを最終課題とし、その授業シラバスと、職業実習前・最終学年の活動としての意義を検討する。なお、日本人の日本語教員が担当する科目として可能な「観光日本語」について考える。

15. 「日本で留学を継続する私」—中国人女子学生のライフストーリーをもとに—

松本明香（東京立正短期大学）

日本の大学で大学生として学生生活を送る留学生にとってこの留学の時期とは、外国語である日本語を用いながらも自己のアイデンティティを確立し、また社会に出るときに形を熟考する必要性があることから今後の進路に大きな影響を与える人生の転換期である。そのような留学生活の中で起きた2011年の東日本大震災は、彼らに将来の進路について改めて考えさせるものとなった。本研究では、将来設計を本人なりに考え精力的に勉学に励んでいた中国出身の女子学生にインタビューを行い作成したライフストーリーをもとにして、東日本大震災を経験し、それでも「日本で留学を継続する私」というアイデンティティをいかに(再)構築したのかを考察する。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

16. 中国人学習者向け漢字教材の開発—日中同形の漢語形容詞—

濱田美和（富山大学）・高島智美（トヤマ・ヤポニカ）・楊峰（富山大学）

本発表は、日中同形異義の漢語形容詞について、中級レベル以上の中国人学習者向けに開発した教材およびその使用結果を報告するものである。本教材では、学習者自身で意味の違いに気づきにくい語のうち、日常よく使う語やまちがって用いた際に誤解を招きやすい語を選定し、教材化した。教材の主な特徴として、関連性のある漢語形容詞を整理しながら学べる構成としたこと、各語の意味記述はポイントのみを簡潔に示すにとどめ、クイ

ズ形式で中国語との意味の違いが把握できるような練習を多く取り入れたことが挙げられる。本教材を使用して初めて意味の違いを知ったという学習者も多かった。

17. 日本語音声教育方法再構築のために―「みんなの音声教育」プロジェクトについて―

嵐洋子（杏林大学）・中川千恵子・田川恭識（早稲田大学）

日本語教育の現場では、発音は教師、学習者の双方にとって頭の痛い問題である。音声学に対する苦手意識もあるし、音声学の知識がすぐ応用できるわけでもない。また、発音を運用場面と切り離し、発音に特化した授業を考えがちである。誰もが苦手意識を持たずに、日常的に発音指導ができるようになるためには、実行可能で具体的な指導項目の提案が必要である。そこで本研究では、学習者が何ができるようになればいいか・どうやってするのかを現場の指導例をふまえて、可視化を試みる。それをもとに、教師研修プログラム・教科書を提案したい。本発表では、区切り、ポーズ、「へ」の字型イントネーションなどに焦点を置いた授業の具体例を紹介し検討する。

18. 学習者の興味からより深い文化的気づきを目指す協働学習の試み―短期日本留学プログラムにおける「伝統」に関するプロジェクトワーク―

和泉元千春（奈良教育大学）

本学の短期留学生の多くは古都奈良での生活への強い憧れや期待感を抱いて本学を留学先として選択しているが、留学期間中に「伝統」に関する文化的気づきが深化されない者も散見される。そこで「奈良の伝統」をテーマとした協働学習を通して文化理解を深めることを目的とした「現代日本論」を開設することとした。伝統に関わる日本人へのインタビューを中心としたプロジェクトワークを行った結果、学習者が複眼的な視点で伝統を捉え直し、現代あるいは学習者自身と結びつけて伝統を理解するといった気づきの深化がみられた。またその過程では、時間管理や考察の焦点化等において教師が重要な役割を果たしていたことが明らかとなった。

19. 日本語の文章読解に関する意識調査―学習者の国別に見られた違い―

片山智子（武蔵野大学）

大学で中級、上級レベルの日本語クラスに在籍する留学生に対して日本語の読解に関する意識調査を実施した。①読むときに大切だと思うこと、②自分の読みが成功した時の理由、③失敗した時の原因について該当する答えを13の項目から選ばせた。学習者の国籍、特に母語の違いが日本語読解に対する意識と関係しているのかを探るため、回答者を中国人学生・韓国学生・南アジアおよび東南アジア出身の学生の3グループ（それぞれ約50名）に分け、分析をおこなった。その結果、中国・韓国学生は語彙や漢字等の知識を重視するのに対して、南・東南アジア出身の学生は要点を見つけることの重要性を意識している等、グループごとの異なった傾向が明らかになった。

20. iPadによる語彙学習教材の多様な学びの可能性

河内彩香・竹山直子・前原かおる・増田真理子（東京大学日本語教育センター）

本発表は、学習者の語彙学習方法が、同じ学習ツールを用いても多様であることを、調査によって示すものである。調査では、発表者らが現在開発中であるiPadによるタッチパネル式の語彙学習教材を、初級初期段階の学習者に同条件で学習してもらい、その様子をビデオ録画した。その結果、同ツールを用いて、新出語彙を短期記憶に格納する今回の語彙学習に、全員が成功しているが、そこに至るまでの学習行動のプロセスは、各人の「学習スタイル」「学習段階」などを反映して、様々であることが観察された。

●ポスター発表（上記5件を含む15件）

21. スマートフォンの普及で変わる教材設計

角南北斗（ウェブデザイナー・元国際交流基金関西国際センター）

国際交流基金関西国際センターが開発し2007年に最初のバージョンが公開された、看護・介護に携わる日本語学習者を支援する学習サイト「日本語でケアナビ」(<http://nihongodecarenavi.jp>)は、2012年4月にスマートフォンにも対応した。この数年で日本語学習者の間にスマートフォンが急速に普及し、学習サイトの利用文脈は「教室などの限られた環境」から「日常の様々な場面」に拡大しはじめている。こうした状況をうまく生かせ

ば、より実用的な教材を学習者に提供することが可能になる。本発表では「日本語でケアナビ」の設計プロセスを例に、これから求められる教材開発の手法について提案する。

22. タイ国大学の日本語の授業における教室活動に対する学習者パーセプション—「やりたい」「楽しい」「役に立つ」の三つの観点から—

スィラダー・ブンサーム（京都外国語大学大学院生）

本研究は、「やりたい」「楽しい」「役に立つ」の三つの観点からタイの大学で行われる日本語の授業の教室活動に対して学習者がどのように感じているのかについて調べることを目的とする。教室活動は海外における外国語教育で非常に重要な役割を持っている。学習者が「やりたい」活動であれば、学習者自身は積極的に授業に参加し、日本語能力が身に付く。また、「やりたくない」活動の原因がわかれば、授業の改善方法が発見できると考えられる。よって、本研究では、タイ人の学習者が「やりたい」「やりたくない」教室活動とその「やりたくない」原因を追究する。これによって、「より楽しく、より効率的な」授業ができると考えられる。

23. 総合日本語中級クラスにおける合意形成能力育成を目指した話し合い活動の実践

宮永愛子・尾崎ちえり・了戒直江（金沢大学留学生センター）

本発表は、中級レベルの総合日本語クラスにおいて、話し合いをまとめる力の育成を目指した活動の実践報告である。学期当初、本クラスの学生の話し合いを分析したところ、①各々が自分の意見は言っても一方通行で、相手の意見に対しその意図を十分に汲み取った上でさらに自分の意見を述べるができない、②複数出た意見をまとめながら最終的に一つのことを決めていくことができていない、という現状が明らかになった。そこで、学期の前半では一つ目の現状について、学期後半では二つ目の現状改善を目指し活動を行った。特に、学期後半の活動では、付箋を用いて可視化するなど話し合いをまとめるプロセスに意識を向けるよう促す工夫を行った。

24. 中国語北方方言母語話者による語頭母音の長短知覚における弁別感度の検討

栗原通世（国士舘大学）

中国語北方方言を母語とする日本語学習者で滞日期間半年未満の12名と3年以上の8名、日本語母語話者8名に同異判断法による語頭母音の長短弁別について知覚実験を行い、語頭母音の後にCVCV、CVR、CVNが続く3条件において、母音の長さが僅かに異なる刺激音間の弁別感度を検討した。その結果、1)弁別が容易な刺激対が日本語母語話者と学習者とに共通していても、学習者の弁別感度の方が低い場合があること、2)日本語母語話者と学習者とでは長短弁別が容易な母音の持続時間の範囲に違いがあること、3)同程度の日本語能力を有する学習者でも滞日期間によって知覚時の長短弁別の傾向は異なる可能性があるということが示唆された。

25. つくばインターナショナルスクールにおける日本語教育プログラム—新体制1年目の取り組み—

河野あかね（つくばインターナショナルスクール）

つくばインターナショナルスクールは、3～16歳までの生徒を対象に英語を基盤として国際理解教育を提供している学校である。国際バカロレア機構の初等教育課程認定校および中等教育課程候補校でもある。生徒は「移動する子供」もしくは「外国にルーツを持つ子供」達で、約4割が共に日本国籍の両親を、約3割が共に外国籍の両親を、残りの約3割が日本国籍と外国籍の両親を持つ。そのため、生徒の日本語能力や日本語使用環境、日本語学習のニーズは多種多様である。本発表では、昨年度から新体制の下で取り組みを始めた日本語教育プログラムにおける1年間の実践内容と今後の課題について報告する。

26. 新しい日本語能力試験に対応した上級日本語聴解eラーニングコンテンツの開発—ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—

篠崎大司（別府大学）

本発表では、ブレンディッドラーニングモデルの構築に向け、新しい日本語能力試験に対応するために新たに開発した上級日本語聴解eラーニングコンテンツを紹介する。本コンテンツは、Moodleをベースに全13回で構成され、ディクテーション問題492題（「言葉の聞き取り」と「文の聞き取り」）、「課題理解」37題、「ポイント理解」49題、「概要理解」37題、「即時応答」73題、「統合理解」25題、計703題の聴解問題と26本の動画解説からなる。

27. 口頭発表クラスにおける発音の意識化を目指した授業の試み

尾崎ちえり（北陸大学）

発音練習の大切さは学習者も実感しているが、発音は実際に指導、練習してもなかなか上達しにくいことがあり、自身の発音をモニターできないことがその要因であると指摘されている。そこで、中国語を母語とする中級レベルの学習者を対象とした口頭発表クラスで、単音レベルと韻律レベルの知識を導入して意識化を図り、クラス外でも自主的に練習ができるよう複数の練習法を取り入れると共に、モニター力を向上させる目的からペアで発音チェックをする活動を行なった。事前準備が可能な発話であるプレゼンテーション発表において、実際に発音が意識されるのか、その活動の効果と課題を報告する。

28. フレージング練習を重視した口頭表現の授業

木原郁子・太田ミュキ・棚橋明美（聖学院大学）・中川千恵子（早稲田大学）

学部留学生対象の「調査・発表」という授業では、大学におけるゼミ発表などを視野に入れ、日本語の口頭表現能力を高めることを目標としている。当授業では、発表内容のみでなく、音声面の学習をどのように行なうかが大きな課題である。そこで、中川(2001)の「「へ」の字型イントネーションに注目したプロソディー指導方法」を導入し、フレージング練習を取り入れた指導を試みた。「学習者の表現能力は、発音（特に文イントネーション）の意識化によって向上していくのではないかと考えて行なった授業のプロセスと、授業内で行なったその結果を報告し、音声面を重視した口頭発表の授業を提案する。

29. 神戸弁演劇の授業に於けるアセスメント—自己と他者のパフォーマンスをどう捉えるか—

柴田あづさ（神戸市外国語大学国際交流センター）

交換留学生の日本語クラスにおいて日本人学生の協力のもと、演劇を通じた神戸弁の指導を行っている。学習効果を上げ、より完成度の高い作品を作り上げるには、題目選定から台本の検討、発音練習、道具作り等の全ての過程における全員の積極的な参加が不可欠となるが、20名以上の大所帯の劇団でそれはなかなか容易なことではない。そこで、2011年度後期には、予め設定しておいた個人レベルの達成目標（評価項目）を発表会終了後に全員で評価し合い、その平均点を成績の一部として組み込むことで全期間における全員の意欲の持続を促そうとした。本稿ではその際に行った自己相互評価の詳細とそこで明らかになった課題について報告する。

30. 大学現場での日本人ボランティアによる効果的な日本語学習支援—「社会型日本語教育」の一形態として—

高橋志野・石橋容子・田中喜美代（愛媛大学国際教育支援センター）

愛媛大学では、口頭表現中心のクラス全てで、日本語ボランティア J-support を継続的に活用している。参加留学生からはボランティアの参加は非常に高く評価されているが、社会人・学生が混在し、毎回異なるメンバーがボランティアとして参加する授業では、事前準備、授業中のファシリテーション等で、担当教員が試行錯誤を繰り返してきた。本発表では、この授業を効果的に運営するために教員が行ってきた過去4年にわたる試みを紹介し、品田等(2012)の「社会型日本語教育」との共通点を報告する。

【会費納入のお願い】

JLEM では1月から12月までを会計年度としております。2012年度会費(3,000円)未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会員資格失効後に再度入会される場合には、未納分の会費も納入していただくこととなりますのでご注意ください。会費は、下記の口座にお振込みいただくか、研究会会場受付にてお支払ください。ご不明な点がありましたら、[#jlem-ml#tiu.ac.jp](mailto:jlem-ml#tiu.ac.jp) (#は@です)までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店(ゼロイチハチ店) 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通(または貯蓄) ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会

【昼食について】

会場となる教室で持参のお弁当を召し上がっていただくことができます。会場内では下記のカフェとレストランが利用できます。

1階 カフェ&ブラスリー ポール・ボキューズ (セットメニュー1,200円、サンドイッチ他)

2階 ジャルダン ポールボキューズ (ランチ 3,800円～)

また、歩いて五分のところ到大和デパートがあり、地下の食料品売り場で昼食を買うことができます。周辺にはミスタードーナツ、マクドナルド、スターバックスをはじめ様々な飲食店もあります。

【懇親会】

閉会の挨拶の終了後、2階のポスター会場にて懇親会を行います。

ぜひご参加ください。会費は2500円です。

【会場案内】

石川県政記念しいのき迎賓館

<http://www.shiinoki-geihinkan.jp/about/access.html>



石川県政記念 しいのき迎賓館
〒920-0962
石川県金沢市広坂2丁目1番1号
076-261-1111

JR 金沢駅から

JR 金沢駅バスターミナル 東口7～10番、西口4番乗り場よりバスにて「香林坊(アトリオ前)」下車(所要約10分)
徒歩約5分

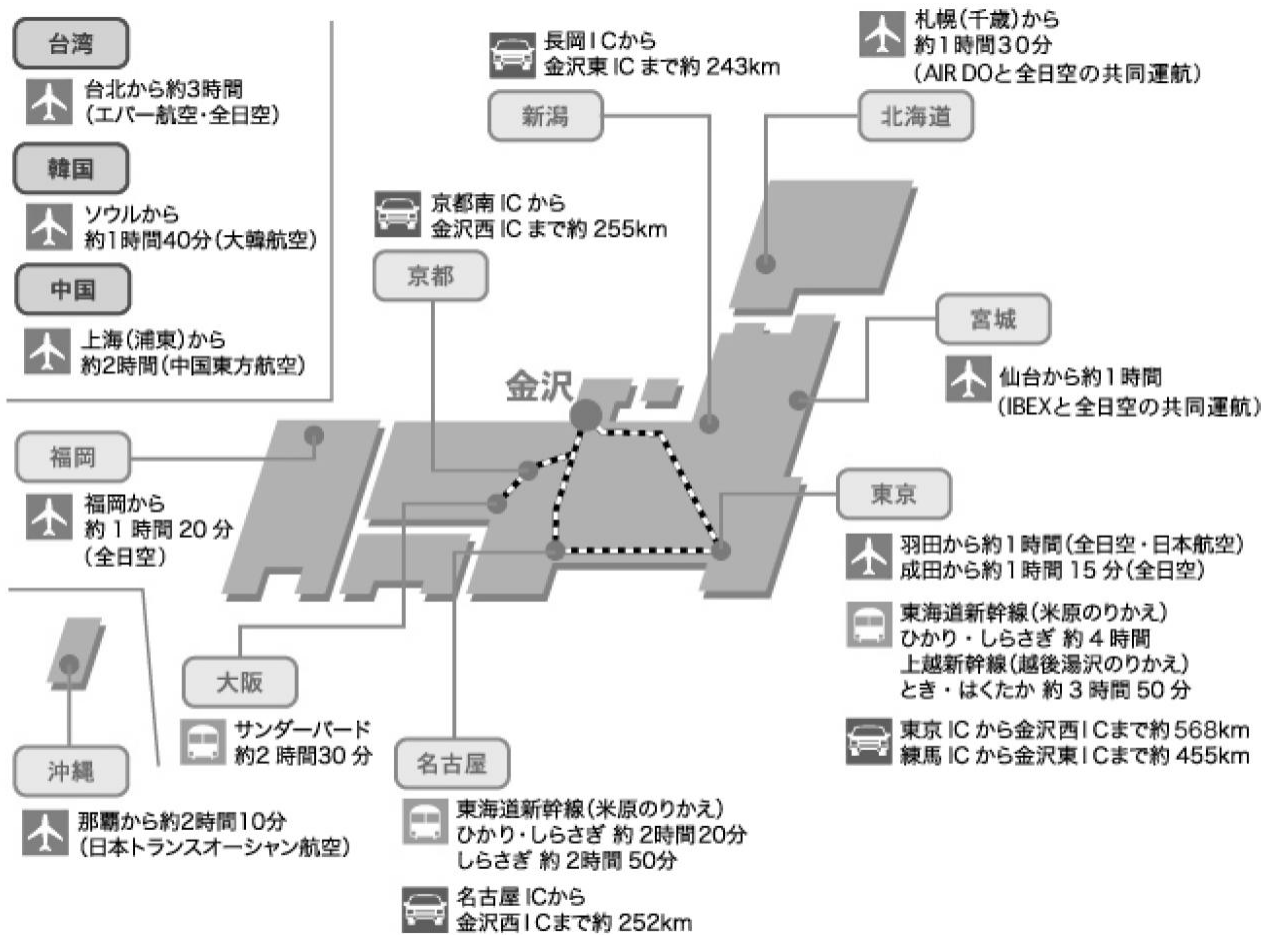
小松空港から

空港連絡バス(金沢市内経由)で約50分。「香林坊(日本銀行前)」にて下車。徒歩約5分

北陸自動車道から

金沢西インターより車で約20分、または金沢東インターより車で約20分

○ 県外から金沢へのアクセス



○ 会場内案内図

